

Historian's View

NO. 24

ワイズメンの歌(ワイズソング)物語
ワイズソングの「なぜ？」
第二の国歌『フィンランディア』
邦訳 - 「たとえば、私なら」
どうして「もう一度」？

2011年1月1日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

ワイズソングの「なぜ？」

「いざたて (Once more we stand)」で始まるいわゆる『ワイズソング』(日本語では『ワイズメンの歌 いざたて』が正しい)には、いくつもの、「なぜ？」があります。

なぜ、作られた時期が不明なのか。

なぜ、1928年に行われた大阪クラブのチャーターナイトの式次第に、『ワイズソング』が載っていないのか。

なぜ、ジョージ・カイトル著の『HISTORY OF Y'SDOM』に『ワイズソング』として認定された状況の記述がないのか。

なぜ、曲にシベリウスの「フィンランディア」が用いられたのか。

なぜ、「Once more (もう一度)」なのか。

いずれも、この歌の生まれた時と関連がありそうです。その生い立ちから書きます。

第二の国歌「フィンランディア」

『ワイズソング』は、ワイズメンズクラブ国際協会の創立者ポール・ウィリアム・アレキサンダー (Paul William Alexander 1889-1967) が作詞しました。

*Once more we stand,
New zeal our hearts imbuing;
We raise our hand,
Our service pledge renewing.
Ne'er to deny our motto's claim
Y's men in fact as well as name.
Always our objects to pursue,
We consecrate ourselves anew.*

NO 24 - 1

*As now we sing,
In comradeship more binding;
Our love we bring,
Reward in friendship finding.
To every Y's man far and near,
We pledge devotion most sincere!
Glory and pride Y's men to be,
Fill ev'ry heart with loyalty.*

曲には、フィンランドが生んだ大作曲家、ジャン・シベリウス(Jean Sibelius 1865- 1957)の交響詩『フィンランディア(Finlandia)』があてられています。

ジャン・シベリウスは、交響曲、交響詩、劇音楽、管弦楽、協奏曲、ピアノ曲、室内楽曲、声楽曲など膨大な作品を残しています。中でも、交響曲第2番、ヴァイオリン協奏曲、「トゥオネラの白鳥」や「タピオラ」などの交響詩は傑作とされています。

彼が、国民的作曲家として、フィンランド国民に熱狂的に受け入れられているのは、1899年に発表した、第二の国歌といわれる『フィンランディア』によるものです。

当時のフィンランドは、ロシア皇帝ニコライ2世の圧政下で、虐げられ、苦しい日々を耐えていました。1899年に、フィンランドの歴史を描いた演劇のヘルシンキでの上演が企画され、音楽をシベリウスが作曲しました。この曲が感動を呼びました。翌1900年には、パリで開催された万国博覧会でも上演され、広く知られるようになったのです。

曲の後半の美しい旋律には歌詞がつけられて、「フィンランディア(フィン:フィンランド、ランディア:賛歌)」として、フィンランド人の愛国心を鼓舞し、弾圧に屈せず、独立運動に向わせました。さらにヨーロッパ各地で演奏されることによって、諸国の世論の支持を得るようになりました。

かくして、ロシア革命の後の1917年、フィンランドの独立宣言がなされたのです。

「フィンランディア」には、いくつも歌詞があったようです。最近のものでは、1941年の詩人のヴェッコ・アンテロ・コスケンニエミ(Veikko Antero Koskenniemi)によるものがあります。シベリウス本人が合唱曲用に編曲したものです。日本語訳を紹介します。(ウィキペディアから)

おおフィンランドよ、見よ、おまえの朝が明ける
夜の脅威は消え去った
ヒバリは輝く朝を歌う
あたたかも空が歌うかのように
夜の力は朝の光によって打ち負かされた
おまえの朝が明ける、祖国よ

おお立ち上がれ、フィンランドよ、高く掲げよ
偉大な記憶の冠が飾るおまえの頭を
おお立ち上がれ、フィンランドよ、おまえは世界に示した
(他国への)隷属を追いやったことを
そしておまえが抑圧に屈しなかったことを
おまえの朝が明ける

讃美歌 298 番『やすかれ、わが心よ』

フィンランディアは、讃美歌「やすかれ わが心よ」(現在の日本キリスト教団『讃美歌』298番、同『讃美歌 21』532番)の曲としても使われています。

この原詞の「Stille, mein Wille, dein Jesus hilft siegen」は、18世紀のドイツのルター派系修道女で讃美歌作家のカタリナ・フォン・シュレー

ゲル(Katharina von Schlegel 1697-?)の作で、「ケーテン聖歌集」に収載されていました。1933年に、米国長老合同教会が、公定讃美歌集「The Hymnal 1933」の編纂にあたって、ドイツ語を英訳してフィンランディアの曲をつけることの許可を求めました。シベリウスは、快諾して、1932年に讃美歌にふさわしく編曲したという説があります。この曲によって、アメリカを中心に広く歌われるようになったようです。

この讃美歌は、日本では最初に、1954年に発行された『讃美歌(昭和29年版)』に「やすかれわが心よ」と訳がつき、収載されました。

オフィシャルソングに決った時期

アレキサンダーが、いつ『Once more we stand』を作り、いつ『ワイズソング』として認められたのかは、不明なのです。

『HISTORY OF Y'SDOM』には、(1920年度版)、(1920-1953年度版)、(1972年度版)があります。とは、これまで日本では存在を知られていませんでしたが、今回、奈良信さん(東京山手)から、区に寄贈されました。

いずれにも、アレキサンダー名誉国際会長の功績を挙げ、加えて、ワイズメンのオフィシャルソング『Once More We Stand』の作者であるとだけ書いています。ということは、が脱稿された1945年以前の作ということになります。には、『Once More We Stand』は、1922年に制定された「入会式辞」よりも「a later time」とありますから、1923年以降となります。

また、の「Songs of Y'sdom」の項では、数々のワイズメンの歌の題名とその作者を紹介し、これらでワイズ歌集を編纂していたことを記しています。歌の中には、アレキサンダーが作った別の歌や、歴代国際会長の主題を題材にした歌などがあります。その中で「ワイズマンによるワイズメンのための最も卓越した歌が『Once More We Stand』である」と紹介しています。

しかし、オフィシャルソングとして、他の歌と、

一線画してはいないのです。それどころか、「多くのクラブは、例会を、アレキサンダーと同じトレドクラブのチャーターメンバーであるドーマン・リチャードソン (Dorman Richardson) が作詞した『Y's Men's Doxology(ワイズメン賛歌)』で開会している」との記述もあります。

1980年のストックホルム国際大会では、2年間をかけて編纂したという『Y'S MEN'S SONG BOOK』が配布されました。60曲あまりのワイズに関する歌が収載されています。『Once More We Stand』は冒頭にありますが、特別扱いではありません。歌の中には、「The Y's Men's Song」、「Y's Men's Club Song」、「Y's Men's Hymn」という曲名もあります。

一方、国際協会創立75周年を記念して1997年に発行された『A Fellowship of Service』では、アレキサンダーの死去の項に、「美しく、意味深い詞のワイズメンズソングの作詞者」と記し、資料篇に『ワイズメンズ・ヒム』として歌詞を掲載しています。

いずれも、いつ作られ、どこで、オフィシャルソングとして認められたか記していないのです。

これは、私の想像ですが、『Once More We Stand』は、当初、ワイズメンズクラブのオフィシャルソングとして正式に認証されておらず、他のワイズメンが作った歌と同じような一曲だったのではないのでしょうか。そのことは、価値を減ずるものではなく、多くの歌とともに歌われた歴史の中で、公平に選択されたというべきでしょう。

日本のYMCAでも、1980年代には、「YMCAの歌」が3曲ありました。

YMCAの歌(1)「神と人にとり その身をば」

作詞：桜井信行 作曲：津川主一 1934年

YMCAの歌(2)「若人の熱き祈りは」

作詞：淵田多穂理 作曲：津川主一 1954年

YMCAの歌(3)「新しい明日を」

作詞：小出博子 作曲：津川主一 1983年

それぞれ、記念の年に懸賞募集して決定したものであり、その時代の想いを表現し、受け入れら

れていたものが、歳月を経て、1つにまとまったことと同様なのかもしれません。

日本への導入時期

それでは、この『Once More We Stand』がいつ、日本に紹介されたのでしょうか。

前述のように1928年1月8日に行われた大阪クラブの日本における最初の国際協会加盟認証状伝達式の式次第には、『ワイズソング』はなく、君ヶ代二唱とあります。次に1930年に行われた京城クラブ(ソウルに日本のクラブとして設立)と神戸クラブの伝達式次第には、君ヶ代二唱とともに、「クラブ・ソング」があります。しかし、それが『Once More We Stand』であったかどうかは分かりません。

当時、大阪クラブは、『おさな心にたちかえり』など、自作のクラブソングをもっていました。1929年の新年初例会のプログラムには、「クラブソング『Have Some Pie』」と記しているなど、毎月、クラブソングを歌っていますが、いくつかある歌の中から選んでいた印象を受けます。

1936年の同クラブ創立10周年(大阪クラブの創立は1928年ですから、前身である大阪Yクラブからの通算だったのか)の式次第には、「クラブソング8番、15番」と書かれています。国際協会の歌集を入手していたのでしょうか、それとも自前の歌集をもっていたのでしょうか。

大阪クラブの戦前のプリテンは、1937年分まで保存されています。しかし、『Once More We Stand』の文字は見当たりません。もし、国際協会で、『Once More We Stand』を公式に認めていけば、加盟している日本に連絡がない筈はありませんし、もしも、日本に伝わっていれば、クラブやメンバーの意識高揚に腐心していた奈良傳さんが、一大キャンペーンを行わなかったわけがないと思います。

太平洋戦争前に伝わったとすれば、奈良さんが北京YMCAに移った1938年から、日本区が国際協会を脱退した1941年までの間隙でしょう。

戦後、1946年9月に大学を卒業した奈良信さん（奈良傳さんのご子息：東京山手）は、大阪クラブが再開間もない例会で歌っていたことを記憶しています。意味もわからない人にまで、英語で歌わせている、という反発を抱いたそうです。

しかし、戦前から活動をしながら国際協会に未加盟であった京都クラブの『国際加盟50年の歩み』の集会記録資料によると、1947年の例会のプログラムには、讚美歌はありますが、ワイズメンは載っていません。

日本語訳 - 「たとえば、私なら…」

いつからかは分かりませんが、日本では英語で『Once More We Stand』を歌っていました。

1961年の末、東京山手クラブに属していた淵田多穂理主事が、「日本語に翻訳して歌ってはどうか」と提案して、「たとえば私なら」と翻訳案『ワイズメンの歌 いざたて』を示しました。東京山手クラブのメンバーは、これを気に入り、翌年1月からクラブ内では日本語で歌うようになりました。「山手では、日本語『いざたて』で、全員、舌を嚙まず、感情を込めて歌えるようになった」と、『山手ワイズの45年』（1998年）は記しています。

『いざたて』は、この年の10月、東京山手クラブがホストを務めた東部部会で披露されました。なるべく日本語の文献をつくろうという区の方針とも合致して、大阪サービスオフィスは、さらに推敲を依頼し、翌1963年に版權を譲り受け、国際協会承認の日本語歌詞としました。

より原詞の思いに近づけたいと、詞の見直しに協力した奈良傳さんは、「日本語でまず意味をとらえて、さらに原詞を読んでもらいたい」と記しています。（ワイズ・フーズ日本語版）

いざ立て 心あつくし
手を上げ 誓い新たに
われらの モットー守る
ふさわし その名ワイズメン

絶えせず めあて望み
この身を 捧げ尽くさん

歌えば 心ひとつに
ともがき 広がりゆきて
遠くも 近きも皆
捧げて 立つやワイズメン
栄えと 誉れ豊か
まことは 胸にあふれん

楽譜は、「ワイズメンの歌 いざたて」というパンフレットが配布されました。そこには「（元詞は、ポール・アレキサンダーによるもので）曲は、Finlandia によっている。この歌の版權は同協会（ワイズメンズクラブ国際協会）がもっている」と記されています。この『いざたて』は、すぐに全国に普及しむかで、現在、原詞で歌っているのは多分、東京クラブ、東京むかでクラブ、東京センテニアル（ハングルも）くらいでしょう。

訳詞者・淵田多穂理さん

訳詞者・淵田多穂理さんの多彩にして波乱な人生は、『YMCA 人間抄史』（星野達雄・別冊東京青年133号1981年 東京YMCA）『この人を忘れないで』（岩越重雄・日本区報181号1994年）伝記『 - とこしえの希望^{のぞみ}に燃えてYMCAと淵田多穂理 - 』（星野達雄・1997年 東京YMCA）に感動的に描かれています。

淵田多穂理さんは、熊本県人吉の出身。1920年に旅順工科学堂（後の旅順工科大学）を卒業と同時に南満州鉄道（満鉄）に入社。技術担当のエリート幹部として、鉄路の敷設、列車の運行のために活躍しました。一方、北京崇徳教会に属し、北京日本人YMCAの理事も務めました。

この生活を一転させたのは、敗戦。着のみ着のまま家族とともに帰国、郷里に戻りました。1948年になって、熊本YMCA設立の話が出て、淵田さんは、生涯をYMCAに捧げる覚悟で主事を引き受けました。51歳。ここから苦闘が始ま

りました。設立のために、ダブダブの軍靴を履き、チューブのない自転車で市内を走り回ったそうです。戦時中、野戦鉄道隊の兵卒で満州にいた岩越重雄さん(大阪ヴェクセル)は、この人が、あの淵田さんかと、到底信じられない思いであった、と書いています。淵田さんの長女・社本美穂子さんは「熊本時代は、ほとんど生活費を家に入れなかった」と、星野達雄さん(信越妙高)の取材に答えています。

事務所に机もない状態を脱し、熊本 YMCA を軌道にのせ、阿蘇キャンプ場も建設しました。1953 年、淵田さんは、日本 Y M C A 同盟に移り、苦境にあった金沢 YMCA の再建のために金沢に赴任することになりました。

熊本を去る数か月前に、日本 YMCA 同盟が成立 50 年記念行事として募集した YMCA の歌に応募して、当選したのが、『若人の熱き祈りは、百年の歴史をつづる』です。

この時の選者であり、曲をつけた作曲家・津川圭一さんは当時、「私はこの曲に深い感銘を受けたので、僅か 5 分間でメロディーが出来た」と語ったそうです。

淵田さんは、晩年は東京 YMCA で働き、1970 年 5 月に 73 歳で逝去するまで YMCA のために尽くされました。彼が YMCA について記した文があります。一部を紹介します。

「YMCA は、先駆者または開拓者と呼ばれる。私は近頃「ブルドーザー」だといっている。種子を道路や石地やいばらの中に空しく播き散らすような愚をなさないように、ブルドーザーは先ず耕やす。良い種子をかかえて、播くべき良い畑がないと、かこっている人があったら、Y という耕された土地に来て遠慮なく播きなさい。『これ皆の者が一つとなるため』(ヨハネ 17 章 21 節)は、YMCA のモットーであり、そのために YMCA は、常に心を砕いて労していることを知っていただき、協力してほしいのである。」

淵田さんは、エスペラント普及、禁煙運動にも情熱をかたむけました。

淵田さんについて、もっと紹介したいことがあります。ぜひ、前に記した文献をお読みください。

なぜ、「ONCE MORE」なのか

『Once More We Stand』が国際協会のオフィシャルソングとなった時期は不明と書きましたが、アレキサンダーが作詞した時期も不確かです。

1997 年発行の『日本ワイズメン運動 70 年史』に、私は、「1934 年ごろ」と書いています。申し訳ないことですが、今回、1996 年ごろのメモを見ても、何から引用したかが分からないのです。

当時としては、1934 年ごろと判断する何かがあった筈ですが、今は、根拠が示せないことをはっきりさせておきます。

以下は、不確かさの上に立った推論です。

1934 年とすれば、讚美歌に遅れること 2 年。シベリウスは 69 歳で、1925 年から作曲活動を中止して、なぞの沈黙といわれる時期です。

アレキサンダーにとっては、名誉国際会長に推挙され、議決権はありましたが、一度も行使しなかったといわれる時期です。その一步退いていたアレキサンダーに、「Once more we stand」と言わせる「何か」、あるいは「いつ」があったのではないのでしょうか。

『HISTORY OF YSDOM』の 1930 年代前半を見ました。1933 年の国際大会の記録がないのです。翌 1934 年の項に、前年の国際大会は予定していたが、経済恐慌のため中止したと記されてきました。『A Fellowship of Service』(国際協会 75 周年版 1997 年)には、さらに具体的です。

1930 年代初頭、経済恐慌のため、国際協会、特に北米ワイズメンは、財政的に圧迫されました。会員は自分の生活を守らざるを得なくなり、会員の減少、クラブの脱落が起こりました。国際会費、国際加盟金、入会金を減額しました。ミネソタのセント・ポールで開催予定だった国際大会を中止せざるを得なくなりました。

創立以来、比較的順調に発展していたワイズダムにとっては衝撃的なことであったでしょう。

もうひとつ、ワイズメンにとっての危機は、第二次世界大戦と、その終戦でした。

戦前、ワイズダムに属するクラブのあった地は、あるいは戦場となり、あるいは爆撃を受けました。多くのクラブが脱退、活動中止に追い込まれました。国際大会が中止になることも、3人の国際会長が応召される事態もありました。奉仕クラブの中でも、若いメンバーの多かったワイズメンズクラブは打撃を受けました。終戦時点において、北米のワイズメンの4人に1人は、兵役に就くか、軍務を経験していました。

このことは、『HISTORY OF Y'SDOM』（1920-1945年度版）に章を設けて記されています。

しかし、この『HISTORY OF Y'SDOM』には、『Once More We Stand』がすでにオフィシャルソングとなっているという記述があります。ですから、第二次世界大戦終了が、アレキサンダーに「Once more」と言わせる「いつ」、「何か」であった可能性は低いと思います。

いずれにしても、アレキサンダーは、危機に直面して、もう一度立ち上がり、再び理想を目指すという強い意志を込めて、あのフィンランド国民を奮い立たせたフィンランドピアを選び、詞を書いたのではないのでしょうか。

この歌は、常にメンバーとクラブに、励ましを送っています。だからこそ、多くの歌の中で生き残り、『ワイズソング』としての地位を占めたのだと思います。

藤井国際会長の就任メッセージ

2010-2011年度国際会長である藤井寛敏さん（東京江東）は、国際会長のテーマとして「Once More We Stand」を掲げました。

横浜国際大会での国際会長就任スピーチで、「この歌詞を作った、われわれの組織の指導者、ポール・ウィリアム・アレキサンダーがわれわれの組織を作った時の情熱とワイズの将来に対する思いをもう一度思い返していただきたいのです。もう一度立ち上がろう、立ち上がるのには力

もいるし、苦痛もあるかもしれない、立ち上げれば新しい景色が見えてくる。立ちあがらない限り、新しい景色は見えない」と訴えました。横浜での国際議会では、国際協会結成100年を迎える2022年へ向けての"Vision2022"を実現するための委員会「Towards2022」が発足しました。時代の変化に対応した組織にしていくために、「心新たに立ち上がろう」ということなのです。

ワイズソングと讃美歌 298 番の違い

讃美歌「やすかれ わが心よ」も、ワイズソングもフィンランドピアを曲として採り入れました。楽譜上、どのような違いがあるのでしょうか。

石丸由理さん（東京武蔵野多摩）は次のように指摘しています。

「当然なことですが、讃美歌 298 番とワイズソングのメロディーは基本的に同じです。両方ともリズムの違うところがありますが、それは歌詞の都合で譜割りが変わったものと判断できます。」

「明らかな違いは、同じようなメロディーの繰り返しとなる、最初の2つのフレーズの終止形です。ワイズソングは、フィンランドピアと、終止形（楽譜では第4小節の1拍目）が違っていますが、讃美歌 298 番は、同じです。「最後から2小節目も少し違いますが、これは和声的（音楽的な流れ）には同じなので、言葉の関係からくる音割りの差と解釈して良いと思います。」

「問題は、国際の『Once more we stand』と日本の『いざたて』が違うことです。『いざたて』は、讃美歌 298 番のメロディーで歌われています。日本では、はじめ国際と同じメロディーであったものが、讃美歌 298 番のメロディーと混じり、楽譜もいつの間にか讃美歌と同じになったのではと思います。」

『やすかれ わが心よ』は、前に述べたように1954年に日本に紹介され、頻度高く歌われてきて、多くの人にはなじみのメロディーだったので、『Once More We Stand』も、一部では、讃美歌と同じメロディーで歌われてきたのでしょうか。

横浜国際大会で伴奏を担当した石丸さんは、悩んだそうです。正調で弾いても、日本流に弾いても、弾き間違えたと思われるからです。

どこかで、楽譜どおりに歌うようにする必要がありますのでしょ。

それぞれの思い出を重ねて

1950年、この年の日本区大会は、国際会長の来日日程に合わせて、3月に、原爆の傷跡も生々しい広島で行われました。ワイズメンたちは、列車にキリスト誕生物語からの「東方博士号」という名を勝手につけて、示し合わせて、各駅から乗り込みました。夜行各停で、早朝、広島駅に着いた彼らは、広島クラブのメンバーが経営する茶房「ムシカ」に案内されました。その時、巨大な電気蓄音機から、フィンランディアが流れました。

その荘重さに打たれ、皆、疲れを忘れて奮い立ち、広島クラブの配慮に感動したそうです。

『日本ワイズメン運動史』(1980年)に、1964年の米国・エステスパークで行われた国際大会に参加した福田垂穂さん(東京)は、こう報告しています。「閉会式のとて、ワイズソングを歌っているときに隣席の米国ワイズメンが絶句して、すすり泣き始め、歌が終わると、私の手をとって、『この歌がこんなに自分の心に響いたことはなかった。それはあなたが隣にいるからだ』。私も同じ気持ちで、大会を通じてワイズメンがひとつに繋がる兄弟だと感じた」。

2010年7月に逝去された福尾満里子さん(東京目黒メネット)の告別式の前奏にはフィンランディアが流れました。メネットとして55年、ご自身も何度となくこの曲を伴奏されたことでしょう。この歌で送られて旅立たれたワイズメン。ワイズメネットは数多いのではないのでしょうか。

前述の広島・日本区大会の喫茶店「ムシカ」の話。小川圭一さん(東京世田谷)の事務所名が「アロマ・ムジカ」ということが以前から気になっていました。ある時、小川さんが広島出身だということで聞いてみました。「広島駅前にあったムシカ

という店を知っていますか」。「知っているどころか」。高校生時代は入り浸りで名曲を聴き、それが音楽を仕事にするきっかけになったそうです。

1997年に淵田多穂理さんの記念会の数日後、やはり出席されていた岩越重雄さん(大阪ヴェクセル)さんから、はがきをいただきました。

「あなたは、誠に面白い方で、明治学院大学教授の福田垂穂さんと、淵田多穂理さんを長い間、混同されていたと申された。成程、私でも・・と合点しました。今回、皆様にお配りした小誌(日本区報1994年1月「この人を忘れないで」)をお読みいただきますと、男泣きせざるを得ない場面が多々あり。淵田さんは一族あげて(YMCAのために)闘ってくださったのです」。

ベトナム戦争が激しさを増している頃、世界YMCA同盟から、南ベトナムの難民キャンプに支援のために派遣されていた宮崎幸雄さん(後に日本YMCA同盟総主事)は、死とも向き合う緊張した日々を過ごしていました。ある日、教会の礼拝に出席しましたら、讃美歌は、298番でした。一瞬、在籍していた大阪サウスクラブ時代の楽しかった交わりの光景を思い出したそうです。

それぞれが、この歌に自分の思い出を重ねているのです。

あとがき

養老孟司氏は、著書『バカの壁』で、「『全ての白鳥は白い』ということを実証するために、たくさん白鳥を発見しても意味が無い。『黒い白鳥は存在しないか』と厳しく反証に晒されて、生き残るものこそが科学的理論だ」と言っています。

その見方からすると、この文は、スキだらけでアバウト、歴史ではなく、物語です。

長文を費やしなが、冒頭に掲げた5つの疑問にも十分答えていません。

アバウトはアバウトなりに、歌と、それにまつわる人がいる面白さを書かせていただきました。

(歴史上の人物につきましては、敬称を省略させていただきます。)